

現時点での私のブラックバス問題への かかわり方と覚悟

水口憲哉
みずぐちけんが 東京大学農学部水産学系 助教授

二月二四日のブラックバス問題の公開討論会をめぐって生じたいろいろな社会現象は異常とも言える過熱さを示し、ある種の社会問題となつてしまつた。この社会問題をどのように考え、対応したらよいかについてはもう少し時間が経過しないと見えてこないこともあるので、臆さが沈静化してからじっくりと検討し本誌で報告したい。今号では先に述べた立教大学における公開討論会に、釣り人側のパネリストとして参加してその渦中にずつぷりはまり、それなりに整理できたこともあるので、現時点でのブラックバス問題へのかかわり方と覚悟のほどをまとめておきたい。

まず、なぜこの討論会へ参加することになつたのか。昨年の十一月一〇日東京大学農学部で行われた野生生物保護学会二〇〇〇年大会での自由集会「ブラックバスとどうつきあうか」での筆者の発言(この集会の詳しい内容は「週刊釣りサナデー」の十二月後半の号に二回にわたって掲載された)と、本誌におけるこれまでのブラックバス問題に関する文章との両方から、日本釣振興会から参加して欲しくないかと打診があった。日釣振は生物多様性研究会から公開討論会を申し込まれ受けたものの、生物多様性とが生態系を

てそれらとブラックバスとの関係について、討論の場で琵琶湖博物館の中井克樹さんに対応する人とうするか困つていたようである。というのは、世をあげてブラックバス駆逐論で、日本魚類学会も水産庁のゾーニングに関する試行案について反対声明を出すなど、まさに一徹論バスタータキでも言うべき大政翼賛的ムードの中で、芦ノ湖や河口湖はいいじゃないか、子どもたちのためのバスポイントづくりをなどと声高に発言する研究者などまずいなからである。

しかし、筆者は次のような考え方という立場でこの討論会に参加した。

(1) 一九九二年八月九日の日経新聞の「ブラックバスを害魚として対決。釣り人も大繁殖せず、レジャーで定着。漁民も絶滅が必要、フナやアユ減る」という見出しの記事中で筆者は次のように語っている。「河口湖の漁獲がマ、魚種の崩壊のように観光資源として積極的にバス釣りを奨励しているところもあり、バスを害魚と呼ぶのはもう古い。琵琶湖についていえば、ほかの淡水魚がいなくなった場所に比較的環境に適応しやすいバスがすんでいるだけ。フナなどの減少は環境破壊などの人的要素が原因でバスのせ

生物多様性研究会と日本釣振興会共催の公開討論会 「ブラックバスにどうかかわるか二一世紀の釣りのあり方」(2001年2月24日)に パネリストとして参加するにあたっての水口の考え方

■日本の在来の淡水魚類が著しく減少した原因

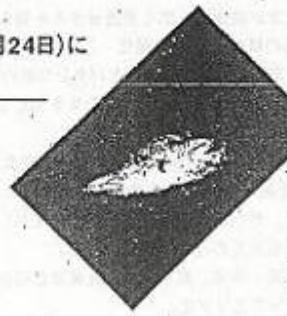
大きな湖沼	河川	小さな湖沼
① 生息環境の改変	生息環境の改変 (ダム河口堰、砂利採取、河川工事)	生息環境の改変
② 漁業者の漁獲圧力	漁業者の漁獲圧力	バスなど外来魚
③ バスなど外来魚	新化放流事業	

■生物多様性についてどう考えるか。そしてバスの日本における存在について

生物多様性の維持のために生物の生息環境の改変と生物の移殖を可能な限り少なくすること。生物多様性や生態系についてのきちんとした認識を深めることも必要。〇〇は日本にいてはいけない、という考えはとらない。バスは管理された状態での利用はやむを得ないと考える。

■いわゆる水産庁などの「棲み分け論」についての考え方

漁業権魚種として認可された漁協については認める。バスを望まないところには極力入れないようにして、できるならそこでは減らす。第五種共同漁業権の認定されていないダム湖や池沼については地元の関係者が望むならバスポイント化も試みる。



7ライの雑誌
2001年春 No.53